

しかし、うがった見方をすれば、公益性が「よい宗教」であるための条件とされ、多くの宗教が「公益」を味方につけることによつて「よい宗教」であることを演じようとしているとも言える。戦前の日本社会の公益(国益)に従った宗教と、三・一一以降の公益に奉仕する宗教との間の根本的な違いはどこにあるのだろうか。宗教固有の役割がどこにあるのかを意識しておかなければ、公益という、それ自体決して中立的ではない場に宗教的実践が取り込まれていく危険性がある。

ところで、そもそも宗教固有の役割とは何であろうか。この問いに対しては言うまでもなく複数の解答が考えられるが、祈りとの関係で一例を示したい。何世代にもわたつて、祈りが引き継がれていく中で、それに付随する出来事もまた記憶されていく。三・一一以降の宗教の固有の役割の一つとして、私が強調したいのは「記憶」である。伝統宗教の多くは何らかの形で「記憶のエシックス」を有している。信仰共同体が継承する記憶は、個別の記憶を集合させるだけでなく、それを儀礼化し、身体化していく。膨大な情報に取り囲まれながら、しかしそれゆえに記憶喪失に陥りやすい現代社会において、世代を超えて記憶するという高度に身体的な行為を宗教が担っていくことができるのであれば、それをポスト三・一一の宗教の役割の一つに数えてよいのではないか。

(2) 「宗教の公益性」から「公益の宗教性」の模索へ

三・一一によつてもたらされた危機は、自然災害と人災の複合体であるが、この未曾有の出来事は、あらためて自然への畏怖を呼び覚ました。どれほど科学技術が発展したとしても、自

然の猛威の前では人の存在は、はかない。公益とは歴史的に何であつたのかを日本に即して考えてみると、それは人間社会における利害関係を意味するにとどまらず、むしろ、人間と自然の間にこそ日常的な意味での公益が存在していたのではないかと推論できる。人は自然を畏れつつ、そこから日々の糧を得てきたのであり、動物の命を奪う場合には、供養という形で、畏れと感謝の念を表してきた。

広い意味で祈りを理解すれば、日本における祈りの射程には、自然界や動物が入っていたと言える。この視点から見ると、現代社会における公益理解が明らかに人間中心的で、自然・動物と人間との間で成り立っていた公益をそぎ落とした上に構築された近代的な公益であることがわかる。さらに、生者と死者の間に成り立っていた関係を視野に入れ、過去から未来へと向かう時間軸を用いて、公益概念を拡大すれば、未来世代に対する現代世代の倫理的責任(非存在者への倫理)を考えることもできる。このようにして、人間中心ではなく、現代世代中心でもない公益理解(公益の宗教性)を再発見・再解釈することが必要ではないか。

東日本大震災後の「絆」再興にみる宗教のちから

鈴木 岩弓

一 はじめに

本シンポジウムにおいて、皇學館大学の大会事務局から私に

託された役割は「供養や神事芸能など伝統的な宗教的営みの果たす意味」に関する話題提供である。そこで「伝統的な宗教的営み」を「地域に根ざして前の時代から伝えられてきた宗教的習俗」と考え、今回の震災後のイエと地域の「絆」再興の場面に焦点を当て、宗教のもつ「ちから」を見ていくことにした。

ここで宗教を、仮にヒトとカミとの交渉と捉えてみると、そこにはヒトとカミとの〈直接交渉〉の場合と、両者の間に宗教者が媒介的に入ってなされる、〈間接交渉〉の場合の二種みられる<sup>(1)</sup>。本発表では震災復興に関わる宗教者の活動に焦点を当てるため、宗教者を媒介とする後者の〈間接交渉〉の事例がその中心となる。またそうした交渉の対象となるカミは、機能神のように一つの特化された祈りを専門的に受け入れるカミというよりは、地域の氏神や檀那寺のようなさまざまな祈りの対象となる、いわば全能神的なカミとなる。

東日本大震災では、一五八六九人の死者が確認された(二〇一二年八月二九日警察庁調べ)。この内、九五二六人は宮城県内の死者である。宮城県内の年間死亡者数がここ数年二万人強であることからすると、三・一一から数日の間に、宮城県の年間死亡者の半数近くが集中的に生じたことになる。しかし、震災により奪われたのは生命のみではない。とりわけ地震直後に押し寄せた津波により、人々の生活空間が壊滅的に破壊され、住居はもちろんそこで営まれていた仕事までもが奪われたのである。その結果、震災以前と同等の生活を保持するには困難が多々生じた。このことは、個のみならず群としての人間生活における危機的状況であり、それを脱するためのかけ声

として「絆」の再興<sup>(2)</sup>の声が広く聞かれるようになった。そこで再び興すべき「絆」とは、前述の生命・住居・仕事の場面に即しているなら、血縁・地縁・社縁である。以下、血縁と地縁を中心に考えてみる。

## 二 血縁・地縁にみる「絆」の危機

血縁構成員の「絆」には、二種みられる。〈生者との「絆」〉と〈死者との「絆」〉である。震災に際した「絆」の危機は、まずこの世の人間関係である〈生者との「絆」〉の危機として現れた。具体的には、つい今し方まで生きていた生者との突然の死別であり、生死不明のままに行方不明となった者との分かれであり、亡くなることはなかったものの、それまで集住していた血縁関係者がバラバラに分かれて住むという危機である。血縁関係者が身近な存在でなくなることに、それまでの家族・親族の「絆」には綻びが生ずる。

これに対して〈死者との「絆」〉は、死者や先祖の依代の消失という形で現出する。被災地においては津波で家がすっかり流されてしまったところは勿論、建物が残ったところでも、津波によりその一階が壊滅状態になる建物が多かった。そうなった場合、一階にあった仏壇は直撃を受けることが多く、結果として位牌・過去帳・遺影の流出が多々みられた。これは寺院でも同様で、寺の位牌堂にあった檀家各戸の位牌が流され、寺に保存していた過去帳も流出した。そしてさらに墓地も、津波の直撃により墓石が流され、カロートの中が洗い出され、埋納していた遺骨が流出した。つまり、位牌・過去帳・遺影・遺骨と、

イエの先祖を表すシンボルはすべて消失するケースも起こったのである。近年までの日本人は、死者の弔いをそのイエの子孫が中心となって担ってきた。こうしたイエの扱いは、*ancestor centered*な先祖と子孫との関係で成立してきたが、今回のような先祖のシンボルの喪失は、伝統的な先祖祭祀の流れに危機をもたらすものである。

地縁については、その形成の大前提に、何らかの限定的な空間がある。その空間において人々の集団・社会・生活が営まれることにより、*welfare*が醸し出されるような生活圏が形成され、コミュニティが成立するのである。しかし今回の震災では、地縁の大前提となる空間が地震や津波によって物理的に破壊されてしまった。さらに原発の問題も加わり、それまで営まれてきた集団・社会・生活が大きなダメージを受けることとなった。例えば構成員が生きていたとしても、生活基盤となる空間に住むことはできず、避難所から仮設住宅へといった一時的な住居移動を繰り返さざるを得なくなった。中には他府県への転居もあって、地縁の基礎となる限定的空間の成立が望めず、コミュニティ自体が解体の危機を迎えている。

### 三 「絆」再興と宗教者

阪神大震災時と比した今回の特徴として、仏教・神道・キリスト教・新宗教など、さまざま宗教者による活動が顕在化したことが指摘される。<sup>2)</sup> ボランティアとして物資の支援やマンパワーを提供したのみならず、宗教者ならではの活動も目立った。当初そうした活動は、葬儀や火葬・土葬時の最後のお別れな

ど、被災死者に対する弔いの場において行われた。中には、曹洞宗の信者の葬儀を真宗僧侶が執行するといった超宗派的な場合もみられたが、多くの被災者は宗派の教義的違いに拘泥せず、「お坊さんに儀礼を執行してもらえたこと」が重要であった。また今回の震災では火葬場の能力が追い付かず、宮城県では二一〇八体が一時的に土葬をした後改めて火葬された。そうした短期間での改葬の背後には、死者としての安定度が土葬では低いとする理解がみられた。<sup>3)</sup> 遺体を焼骨にし、葬儀をし、納骨することが遺族の義務で、かかる段階を踏む際に僧侶が執行う儀礼が重視されている。

時間が経過して多少余裕が出てくると、シンボルを無くしてしまった先祖などとの間の〈死者との「絆」〉の問題が浮上してくる。先祖や少し前の死者の戒名・俗名の記憶が断たれてしまった場合には、「弔い上げ」を早くすることにより個別の死者に対する扱いの期間を省略し、皆まとめて「○家先祖代々」として祀るという方法もとられている。他方岩沼市の寺院などでは、墓石脇に建てていた各戸の墓誌を檀家が共同して探し回り、そこに書かれた先祖の記憶を確保して廻った地区もみられる。さらには、先祖のシンボルを新たに創出する動きもしばしばみられ、僧侶が無料で配布する腕輪念珠を亡くなった人一人ずつのシンボルとして複数腕に付ける姿も見られる。また同様に、「手のひら地蔵」という死者を象徴する小さな手のひらサイズの地藏像を被災地で、宗派宗教に関わりなく希望者に配布している僧侶もみられる。死者の記憶を形にすることは、遺族にとり重要な意味をもつ。

地縁に関わる「絆」の再興に、祭りの力は重要である。地域生活の社会的統合機能を持つ機会に、祭りが大きく寄与してきたことは、宗教学的研究がこれまで指摘してきたことである。被災地においては旧来、特に盆の時期の祭りとして灯籠流し・盆踊り・花火大会などが盛んに行われていたが、二〇一一年夏には祭りの準備が困難であったり、花火大会を娯楽性の高いものと考えたりして取りやめたところもみられた。しかし逆にこれまでしばらく休んでいたところで祭りの再生を行ったところもみられた。石巻市の雄勝法印神楽も地元の人々からの強い希望で、震災から二ヶ月ほどたった五月末に開かれた復興市で舞い、地元の人々に「ちから」をもたらしていた。地域の祭りや神楽などは、大きなダメージを受けながらも、止めることなく、概して地縁の「絆」再興の原動力として復興される傾向が強い。

#### 四 宗教の「ちから」

これまでみてきたように、東日本大震災ではその直後より多くの宗教教団が対策本部を設け、震災に対応した支援活動を行ってきた。そうした活動は、その支援内容から住宅提供・資金援助・物資提供・健康維持・宗教的支援に大別できる。このうち宗教者ならではの活動は最後の宗教的支援で、その具体的な内容は読経や慰霊などであった。震災から時間が経つにつれ、被災地では霊が見えるとか、霊に取り憑かれたといった話が聞こえる。こうした死後世界と関連したあの世の話への対応は精神科医や臨床心理士では覆いきれず、逆に宗教者ならば十分に

対応できる守備範囲である。そうした点から被災地における宗教者の「ちから」はまだまだ期待されている。ただその際見落としてならないことは、その時の宗教者の「ちから」は布教としてなされるものではなく、被災地の人々に寄り添う形でなされねばならないことである。そうした状況においては、「自己の宗教とは別の宗教をもつ人々に対する宗教的ケアは可能か」という問題が浮上する。<sup>(4)</sup>宗派の違いは勿論、同じ宗派であっても地域の宗教習俗の影響を受けた「別の宗教」として対峙する場合すら珍しくはないのである。そうした時に、古野清人の次のコトバは大変力強い示唆をもっている。「純粹または正当な世界的宗教は、その信奉する教理、教義はしばらく別にして、現実には存在しない。<sup>(5)</sup>これはいわゆる世界宗教について述べている言説であるが、さらに拡張して考えていくと、宗教と言われるものは、百%教義通りのものは現実には存在しないということになる。自己の宗教における教義の濃淡の幅の中、異なる宗教をもつた人々の宗教的ケアのために、どこに自分の立ち位置をもつかが各宗教者に問われている。

#### 注

(1) 鈴木岩弓「宗教的職能者と民俗信仰」(宮本袈裟雄・谷口貢『日本の民俗信仰』八千代出版、二〇〇九年)、一三三―一四頁。

(2) 木村敏明「震災と向き合う宗教——東日本大震災以降の動向」(『宗教と現代がわかる本 2012』平凡社、二〇一二年)。

- (3) 鈴木岩弓「東日本大震災の土葬選択にみる死者観念」(座小田豊・尾崎彰宏編『今を生きる 1人間として』東北大学出版会、二〇一二年)、一〇三―一二二頁。
- (4) 東北大学文学研究科では、二〇一二年四月より「実践宗教学寄附講座」を設置し、こうした問題を検討し、超宗派超宗教的にそうした対応を取れる専門職「臨床宗教師」の養成システムの構築を目指している。以下を参照。  
<http://www.sal.tohoku.ac.jp/p-preligion/top.html>
- (5) 古野清人「まえがき」(『古野清人著作集』五、三一書房、一九七三年)、一頁。

## デジュリとデファクトの公益

中牧 弘允

現在勤務している吹田市立博物館は今年創立二〇周年をむかえる地域博物館である。吹田市には日本初のニュータウンである千里ニュータウンがあり、そのためもあってか市民活動はきわめて活発で、博物館にも積極的な協力を惜しまない。実際、いくつかの展示には実行委員会方式が採用され、多くの市民が実行委員として参画している。その意味で、吹田市立博物館は市立の博物館ではあるけれども、市民博物館の様相を強く呈している。

コンピュータの概念であるデジュリ (de jure)・スタンダードとデファクト (de facto)・スタンダードを援用すると、

デジュリ・ミュージアムとしては市立博物館であるけれどもデファクト・ミュージアムとしては市民博物館でもあると換言できるかもしれない。そこで、本日の議論の主たる対象である公益の問題もデジュリとデファクトに分けてかんがえてみたいとおもう。

稲場圭信氏の報告は「共感縁」をとりあげていたが、デファクトの公益とは何かという問いかけのようにおもわれた。東日本大震災のあとにさまざまなネットワークがつけられたが、地縁、血縁、社縁とはことなる共感縁のようなものはデジュリというよりはデファクトな縁として結ばれ、はかなく消えゆくものもあれば、永続性をもつものもあるようにみえる。

デファクトの公益は限られた条件下で機能する。たとえば震災というような危機的な状況のなかで意味をもつもののように聞こえたが、デジュリの自治体とか行政とかと連携して永続化するものかどうかが問われているように思う。またフィールドワークよりはアクション・リサーチだと震災後の特定条件下での研究を位置づけたが、これは最後の報告者である鈴木氏の議論ともつながってゆく。すなわち、宗教研究者がアクション・リサーチとして何ができるのかという公益に関連しているからである。

二番目の岡田真美子氏の報告に関して吹田の例をあげれば、里山を切り崩したヌキヤキツネを追いやって造成した千里ニュータウンの非宗教的性格に言及できるかもしれない。ただし、吹田市立博物館は市民によって「神殿」のような役割を果たす施設になっているようにも感じている。しかも、紫金山公園の